

大学の図書館 第41巻第10号 (No.587) 2022 **10**

目次

ダンゴムシとスキマ時間	澤木 恵 ...149
全国大会フラッシュ	
一参加者として	磯本 善男 ...150
大学図書館問題研究会の歴史を見る：2001年～2010年	加藤 晃一 ...151
第53回全国大会（オンライン）に参加して	石立 裕子 ...153
全国大会に参加して	中川恵理子 ...154
全国委員を振り返って（全国大会への思い）	安東 正玄 ...155
大学図書館研究会第53回全国大会に参加して	寺島 陽子 ...156
全国大会に参加して - 雑感と感謝と -	井上 昌彦 ...158
全国大会第3・第8分科会参加報告	山下真佑美 ...159
4回目の全国大会に参加して	川崎 陽奈 ...160
参加する全国大会、作る全国大会：大会実行委員として	赤澤 久弥 ...161

ダンゴムシとスキマ時間

澤木 恵

毎年恒例、全国大会フラッシュ号がやってまいりました。本号には、9月17-19日に開催された全国大会に参加されたみなさまからの、大会の魅力が伝わる記事の数々が掲載されています。今年は参加申込をしそびれて参加できなかった。全国大会のことを忘れていた。フラッシュ記事を読んだら全国大会に参加してみたくなった。そんな方は、来年7-8月頃の予定に「大図研全国大会の情報を確認する」を入れてみてはいかがでしょうか。私も危なかつたので、リマインダを仕込みました。

さて、大会が終わってから、衣替えも間に合わないほどの猛スピードで秋がやってきました。春過ぎから毎日のように見かけていたアリやダンゴムシにも全く遭遇しなくなり、お盆明けから毎週一匹程度増えていた我が家のダンゴムシも、大会の日を境に増えなくなりました。

ダンゴムシを飼う家の朝は早い……こともなく、特に世話らしい世話もされず、一年ほど放置していた花壇の土と落ち葉や煮干しを入れた

きりの虫かごから時折脱走しつつ、我が家のダンゴムシは生きています。そんなダンゴムシ、コンクリートの隙間から出入りしていたり、舗装された歩道で見かけたりすることが多いなどは思っていたのですが、栄養補給の一環として石やコンクリートを食べるので、ある程度人工的な場所を好んで住んでいるようです。

……というような情報が書かれている『ぼく、だんごむし』（福音館書店刊）を大会前夜に借りてきてしまったので、さあ大変。「うちのだんごむしくんにも、いしがひつようだ!!」ソウデスネ。そんなやりとりを天が聞いていたのか、大会初日、たまたまスキマ時間に雨が止んでいたの、いまだ、とばかりに買い物ついでに石を確保してきました。石を食べている様子は未だに目撃できず、食生活が改善されたのかどうかはわかりませんが、今日も我が家のダンゴムシは元気そうです。

来年の開催形態は未定ですが、オンライン参加する場合はまたスキマ時間を虫かごの環境整備に充てることになるのかもしれませんが。

（さわき・めぐみ／東京海洋大学）

全国大会フラッシュ

大学図書館研究会第53回全国大会が、2022年9月17日（土）から20日（月・祝）までの3日間、前々回、前回に引き続き、オンラインで開催されました（参加：137名）。

今号では、「大会フラッシュ」として、大会参加者、大会実行委員の方々に、大会の新鮮な印象を執筆していただきました。大会のプログラムを振り返ることのできる多彩な内容です。

なお、今大会の記録は、2022年12月号（大会記録号）に掲載される予定です。

（会報編集委員会）

一参加者として

磯本 善男

これまでの全国大会は、実行委員として運営サイドで参加することが多かったのですが、今大会には全くの一参加者として参加しました。大会実行委員への参加もお声掛けしていただいたのですが、諸般の事情により辞退させていただきました。お手伝いできなかったのは申し訳なく思いますが、素晴らしい大会にいただいた実行委員の方々に御礼申し上げます。

1日目の相場洋子氏の研究発表では、COVID-19が人文社会科学系の学術論文のオープンアクセス状況に及ぼした影響についての調査報告を聞くことができました。記念講演『読書による知識の体系化--分類・系統・アブダクション』では、読書による知識の体系化について三中信宏氏のお話が聞けました。恥ずかしながら「アブダクション」という言葉自体初耳でしたが、「読み散らかすだけでは読書とは言えない」という言葉にはとても共感できました。最近の業務では電子ジャーナルの価格高騰やオープンアクセス等の対応に追われていますが、読書そのものに向き合えるお話を伺えたのがとても新鮮でした。

記念撮影も昨年度からZoom画面の撮影に

なりました。実地開催の1枚ものの集合写真も良いですが、3枚の中に参加者の画面が映る写真も、実地開催のものとはまた違った一体感があって味わい深いと思います。

懇親会も今回で2回目のオンラインです。実地開催のように気軽に席を移動して他の参加者の方に声をかける、ということは出来ませんが、参加者（カメラをONにしている）全員の表情を見ることができるとするのは、なかなかよいものだと思います。

2日目は第3分科会：資料保存「紙資料から電子資料への置き換えについて考える」、第8分科会：出版・流通「学術情報流通の現状の改善に向けた大学図書館の対応を考える」に参加しました。午前の第3分科会では、資料を保存するために、紙、電子資料どのように活用していくのか、という課題について各大学の事例報告や意見交換がおこなわれました。各大学の電子資料の購読方針等について情報交換ができました。

2日目の午前と午後の分科会の間には、協賛をいただいている企業様3社のプレゼンテーションを見ることができました。全国大会は企業様の協賛も大きな支えになっています。企業様のそれぞれの活動や商品についての興味深いお話を聞くことができました。

午後の第8分科会では、電子ジャーナルの各種問題について意見交換がおこなわれまし

た。転換契約、それに伴うAPCの負担方法の在り方については、これから必ず検討が必要になります。また、今年は円安傾向が顕著なため、電子ジャーナル等の契約金額が大幅に上昇する可能性が高く、どの大学も対応に苦慮されているようでした。それらについて各大学さんとの情報交換ができて、とても有意義でした。

3日目のシンポジウム「『司書』養成の現在地」では、司書（図書館職員）に求められる能力等について、司書課程のカリキュラム、国大図協会の人材委員会の育成計画等のお話を聞きました。学術情報流通を取り巻く環境が変わり、そこで働く我々に求められる能力（資質）も変化しているのだな、と改めて感じました。

3日間、とても濃密なプログラムを堪能させていただきました。全国大会に参加して毎回思うことは、全国大会に参加するだけで満足してはいけない、ということです。これから1年間更に研鑽を積み、更に成長してまた皆様にお会いしたいと思います。

（いそもと・よしお／千葉大学附属図書館）

大学図書館問題研究会の歴史を 見る：2001年～2010年

加藤 晃一

はじめに

大学図書館問題研究会（以下、大図研）創立50周年にあたり、大学図書館史分科会ではその歴史をテーマとした企画を第48回全国大会（2017（平成29）年）から続けている。今回は小山荘太郎氏（三重大学）が2001年から2010年を概観して発表した。本稿はほんの一部であるが全国大会（以下、大会）を中心とした記録である。分科会では小山氏の発表を受けて筆者が各大会や当時の大学図書館の状況について適宜コメントした。

1. 2001（平成13）年

第32回大会は岡山市で開催され参加者は127名（担当：岡山支部）、福岡支部を中心とした有志により会場にネットワークが構築された。大会最終日にホームページ開設を発表し後日公開、メーリングリストは1998年に開始され当時の登録は127名。開設当時のホームページはWayback Machine - Internet Archiveで参照可能である。
<https://web.archive.org/web/20011103004220/http://yicin.komachi.gr.jp/~dtk/>

2. 2002（平成14）年

第33回大会は千葉市で開催され参加者は138名（担当：千葉支部）、千葉大学の学内施設が確保できたうえに無償だったので参加費軽減となった。ホームページに会報のページがアップされ目次や過去の特集が公開された。国立大学では筑波大学と図書館情報大学、山梨大学と山梨医科大学が国立大学法人化前に統合するという大きな動きがあった。

3. 2003年（平成15）年

第34回大会は奈良市で開催され参加者は119名（担当：奈良支部）、主題別分科会の

前に研究発表が設けられた。残念ながら山口支部の解散が報告されている。奈良市での開催とあってオプションで国立国会図書館関西館の見学が組まれていた。個人的には年末年始に大図研仲間4名でロンドンに行ったので自主企画で報告会を行った。

4. 2004年(平成16)年

第35回大会は横浜市で開催され参加者は157名(担当:神奈川支部)、神奈川支部の発案でワーキングランチ的なラウンドテーブルが設けられた。この年に『大図研論文集』が『大学図書館問題研究会誌』にリニューアルされた。国立大学法人化された年だが、10月に新潟県中越地震があり会員のいる大学でも大きな被害を受けた。

5. 2005(平成17)年

第36回大会は広島市で開催され参加者は135名(担当:広島支部)、初日にアイスブレイク的な試みとして分散会が設けられ2日目に全体会とした。広島修道大学図書館の見学があり貴重書に目を奪われた参加者も多かった。岡山支部が解散。手前味噌な話で恐縮だが、この年千葉大学が学術機関リポジトリを公開している。

6. 2006(平成18)年

第37回大会はさいたま市で開催され参加者は123名(担当:埼玉支部)、ほぼ前年を踏襲しているが全体会は初日に戻している。大学図書館では学術機関リポジトリへの取り組みが活発になり、大図研でもオープンカレッジや会報で取り上げている。

7. 2007(平成19)年

第38回大会は神戸市で開催され参加者は99名(担当:兵庫支部)、課題別分科会では機関リポジトリが設けられ、主題別分科会では従来の5分科会を人文・社会系と自然系の2つにまとめている。主題別分科会では人文・

社会系は神戸大学附属図書館、自然系分科会は第II部として神戸大学の海事科学分館及び海事博物館をそれぞれ見学している。

8. 2008(平成20)年

第39回大会は福岡市で開催され参加者は113名(担当:福岡支部)、主題別分科会で前年の自然系が理工系と生物・医学系とに分かれた。分散会は廃止され2日目に企業セミナーを組み込んだ。ブログやSNSを大会運営に取り入れた福岡支部らしいユニークな大会であり個人的にも色々な意味で記憶に残っている。宮城支部が解散。

9. 2009(平成21)年

第40回大会は前橋市で開催され参加者は85名(担当:群馬支部)、課題別分科会では図書館システム分科会でERMSなどコンテンツとシステムの連携が取り上げられた。人文・社会系が2分科会に別れ、人文・社会系②は課題別分科会の出版・流通分科会と連携させた取次の流通センターの見学会であった。記念講演の講師が俳人だったので自主企画で短歌教室が開かれ『プレバト!!』のようだった。奈良支部が2009/2010年度をもって休会。

10. 2010(平成22)年

第41回大会は大阪市で開催(担当:大阪支部)、主題別分科会の枠がオープンシンポジウム(「大学図書館員は消耗品か? -業務委託・市場化テストをめぐって」)となり、翌年には東日本大震災をテーマとするなど喫緊の課題を取り上げたシンポジウム形式の企画が続き主題別分科会は開かれていない。前年の奈良支部に続き新潟支部が休会。

おわりに

大図研の2000年代最初の10年の活動は会員や支部の減少傾向が続くという組織的な問題に加え、国立大学法人化や業務委託の増加

などの厳しい状況だったものの、ホームページの開設、電子ジャーナルや学術機関リポジトリ等の新たな課題にも取り組んできた10年でもあった。大学図書館分科会では引き続き大図研の歴史をフォローしていく予定である。なお全国大会については不完全ではあるが大図研ホームページの「研究活動」にアーカイブされている。また大図研の歴史については会報37巻5号(2018.5)に「大図研創立50周年に向けて:歴史を振り返る(その1)」が特集されているので、それぞれ参照されたい。

今回、筆者がかつて大図研メーリングリストに投稿していた「話のタネ」についても参加者からコメントをいただいた。休止の理由を明かすとともに再開を約束し5年ぶりの投稿を始めたところである。

(かとう・こういち／千葉大学附属図書館)

第53回全国大会(オンライン)に参加して

石立 裕子

2022年9月17日(土)～19日(月・祝)に開催された大学図書館研究会第53回全国大会に参加しました。今年もオンラインでの開催となりましたが、オンラインにはオンラインの良さがあります。なんと会員なら参加費は無料です。無料。私の好きな言葉です。

こんな人間が「大学の図書館」に文章を載せてよいのかと一瞬悩みましたが、印象に残ったこと、勉強になったことや参加してよかったと感じた部分を紹介させていただき、非会員の方々には「ぜひ会員になりたい!」と、今まで参加を迷っておられた会員の方々には「次回はぜひ参加したい!」と少しでも思っただけなら一筆の価値ありと考え直した次第です。私大だけに。

というわけでさっそく個人的なおすすめポイントを紹介させていただきます。まず、全国大会の顔はなんといっても分科会です。大会への参加回数は片手で余る程度の新参加者ですがここ最近は、「大学図書館史」「利用者支援」「資料保存」「キャリア形成」の分科会が午前、「学術情報基盤」「図書館経営」「図書館建築・デザイン」「出版・流通」の分科会が午後で開催されているようです。各分科会は毎年その主題に関するテーマが設定され、参加者同士で議論したり事例報告を聴いたり担当によって様々です。参加される方は午前・午後共にいずれかの分科会に参加することをおすすめします。とりあえず参加～では済まない分科会もありますが、今悩んでいること、知りたいことに合致する分科会があるなら是非参加しましょう。ちょっと気になる程度でも参加することで理解が深まったりより興味をもって今後の業務に反映できたりいいこと尽くめ。今回私は第3分科会:資料保存「紙資料から電子資料への置き換えについて考える」と第8分科会出版・流通「学

術情報流通の現状の改善に向けた大学図書館の対応を考える」に参加しました。

第3分科会は事前に提示された参考文献を読んだり、事例紹介の準備が必要だったりとガッツリ参加型。1人数分ずつ自館紹介と今回のテーマに沿った事例紹介をPowerPointなどを用いて行いました。大学の規模や学部構成が異なる参加者の皆さんから聞く現場の声は新鮮で、視野が広がったと思います。特に文系と理系で教職員の電子化に対する姿勢や考え方に違いがあり興味深かったです。第8分科会は職場でも話題になっていたテーマでドンピシャ。参考文献もすでに読んでいた文献だったので事前の準備なく参加できました。また、改めて読み返し、内容の確認や、意見交換をすることで知識を深めることができました。分科会は本当に業務のためになる！参加して損なしです。

もう1つおすすめしたいのが「地酒の会」です。分科会での真面目な雰囲気とは違って変わって和気藹々としたオンライン飲み会という感じ。各人がお酒やサイダー、お茶、おつまみ、お花などおすすめしたいものをプレゼンし、参照してほしいURLをチャット欄で共有、各人がアクセスして「いいね」とか「おいしそう」とか感想述べるなどなど。本当にどれも素敵で。その後、紹介された“某”茶が品川駅構内で購入できることを知り購入しました。とってもおいしいです。

オンラインも慣れるといいものですね。日程調整や宿の手配などが不要な分、参加のハードルが低いので初めて参加したという方もいるのではないのでしょうか。コロナが収束した後も一部はオンライン参加できるようにしていただくと嬉しいですね。しかしやっぱり。対面が恋しいなあ。

(いしだて・ひろこ／帝京平成大学中野キャンパスメディアライブラリーセンター)

全国大会に参加して

中川 恵理子

第53回大学図書館問題研究会オンライン大会に参加しました。オンラインということで、手軽に参加できる分、皆さんに直接お会いできない寂しさもあります。

大会1日目もっとも印象に残っているのは、記念講演三中信宏先生の「読書による知識の体系化——分類・系統・アブダクション」です。幼い時から現在まで、何気ない形で日常的に行ってきた読書という行為について、そのようなアプローチがあるのかと大変興味深いお話でした。三中先生の語り口も大変ユーモラスで、楽しく聞くことができ、あっという間の1時間でした。

その後は、オンライン交流会に参加して、所属先の東海地域グループの紹介を行いました。各地域グループの紹介後、少人数のグループに分かれての交流となりましたが、ファシリテーターおかげで、オンラインでもスムーズに交流ができました。個人的には、それぞれが最近読んでよかった本の話題が面白かったです。その場で紹介された、図書館お仕事漫画『税金で買った本』は、全国大会後にさっそく購入しました。また、その他にも『福家警部補の挨拶』など、色々紹介してもらったので、手に取ってみようと思います。大会参加者のみなさんと交流できて、リラックスした楽しい時間となりました。

大会2日目は、分科会の日、午前中は第4分科会キャリア形成「管理職としてのキャリア」を担当しました。登壇者の井上さん、大谷さん、高橋さんには、それぞれ管理職になってからの仕事の変化や気を配っていること、コツなどをお話いただき、とてもリアルで貴重なお話を聞くことができました。分科会の参加者のみなさんご協力のおかげで、スムーズな分科会運営となりました。ありがとうございます。

午後は、第7分科会図書館建築・デザイン

「アクティブラーニングスペースの現状とこれからを考える」に参加しました。本学のアクティブラーニングスペースは、現在コロナの中で積極的に活用できていない状態にあります。グループワークでは、他大学の事例を聞くことができ、参考になる部分が多くありました。また、分科会を通して、アフターコロナのアクティブラーニングスペースについて考える契機となりました。

分科会後は、恒例行事である地酒の会に参加です。今回は、拡大版ということで、ノンアルコール、お菓子もOK、アルコールがあまり飲めない私にとって、大変参加しやすかったです。それぞれが持ち寄った各地域のお酒、お菓子、お茶などの紹介を聞くのは楽しかったのですが、美味しそうなのに画面越しに見ているだけで一口分けてもらえないという、もどかしさもありますね（笑）地酒の会での交流を通して、日本全国各地から参加者が集まっているとのだなという実感が湧きました。楽しい時間をありがとうございました。

最終日は、シンポジウム「『司書』養成の現在地」を聴講し、パネリストの2名から大学図書館職員の養成と現状についてのお話を聞きました。司書という業務の専門性や大学図書館の現状について改めて考えさせられました。

今回のオンライン大会に参加して、私が初めて全国大会に参加した際に「これは勉強会であると同時に、図書館員が集まる文化祭みたいだな！」と感じたことを思い出しました。図書館に携わる者同士、大いに学び、交流を深め、今後の業務やキャリアに生かすため何かを得た上で、なおかつ楽しい！これが大図研の全国大会なのではないでしょうか。今年の全国大会も総会からシンポジウムまであっという間の3日間でした。また、来年の全国大会でみなさんにお会いしたいです。

（なかがわ・えりこ／金沢学院大学）

全国委員を振り返って （全国大会への思い）

安東 正玄

私の所属する京都地域グループは、若手から経験豊富な会員までそろっており、地域グループ活動としても活発です。地域グループの運営委員になったとしても、運営委員のみんなが支えてくれているという実感が持てるとてもよい組織です。

そんな中、私が全国委員になったのは2018/2019年度からですが、全国委員はあとで述べるように貴重な経験ができるので、世代交代を見据えて若い人に担ってもらいたいと思っていますが、この間の大学図書館業務の多忙化に伴う、若手へのしわ寄せが運営委員メンバー内でも謙虚にみられ、世代交代を意識しつつも、一定経験を積んではいるものの、図書館から学部事務室へ異動してしまい、図書館のリアルがわからないような私でも一定役割を受け止めるしかないとして、全国委員を引き受けさせていただきました。そして、今回の全国大会でちょうど4年間になり、この大会をもって、次世代へバトンタッチができたことをとてもうれしく思っています。この場を借りて、全国委員・全国大会への思いを述べさせていただきます。

全国委員は、大図研の組織運営にかかわる課題を民主的に議論（各地域グループに持ち帰り議論結果を全国委員会にフィードバックさせる等もしています）し、その議論結果を全国大会の会員総会で報告・審議してもらう流れになっています。特に私が全国委員を担った期間には、組織名の変更とその変更に伴う会則の見直し、発行物の管理の見直しと電子化、会費徴収方法の変更など、今後の大図研をより充実させていくための大切な議論に参加させていただきました。また、全国委員は、全国大会で分科会を担当する役割があり、この1年間重要だと感じた課題やキーワード、または会員の多くの方と共感・共有

したいと思ったことをテーマ設定することが主体的にできるメリットがあります。その意味で、全国大会は、全国委員としての役割としても1年間の集大成とも言えますし、私としては今回の全国大会は4年間の集大成でもあったといえます。

特に今回の第6分科会：図書館経営「大学図書館経営危機をどう乗り越えるか」については、大学が抱えている課題を大学図書館がどう認識して、その課題に大学図書館がアプローチしていくかという話をいつもお世話になっている常世田先生（大図研会員）に公共図書館を事例にしてもらいながらレクチャーしてもらい、参加者皆さんと議論してもらいました。一緒に分科会を担っていただきました全国委員の井上さんの人徳もあって、とても良い内容になったと喜んでいますが、本当に良い仲間恵まれていると感謝します。

最後に、今回の全国大会に参加し、いつもの面々のほかに、新しい仲間もかなり増えていて、大図研の世代交代がうまくいっていると感じることができましたし、これから大学図書館を引っ張っていく人たちの明るく頼もしい姿を見ることもできたことをうれしく思います。大学図書館は、業務の特性上、他大学（海外の大学含む）の図書館員ともつながりやすい環境にあります。これは大学内の他組織ではあまり見られません。このつながりやすいという特性をフルに活用する意味で、大図研を活用し、自分の成長、業務改善、課題解決をしていきましょう。そして、仲間との交流を楽しんでいきましょう。次回の全国大会はまだ詳細は決まっていますが、対面での実施も含むハイブリッドでの開催を目指すとされています。次回全国大会までに今回であった仲間との交流を深めつつ次回全国大会でお会いしましょう。

（あんどう・せいげん／

立命館大学法学部事務室）

大学図書館研究会 第53回全国大会に参加して

寺島 陽子

2022年9月17日（土）～19日（月・祝）に開催された大学図書館研究会第53回全国大会に、17日（土）～18日（日）の2日間ですが、参加させていただきました。

会員総会は、接続に手間取ったため、途中からの参加となりました。事前に接続先を確認し、早めに準備を始めるべきであったと反省しています。娘のパソコンを借りたため、表示名が娘の名前になってしまって、慌てて変更しました。

研究発表「What about the Humanities? COVID-19のオープンアクセスへの影響と人文社会科学の未来について」は、国際教養大学中嶋記念図書館の相場洋子氏による、コロナ禍のジャーナル論文数の変化、特にオープンアクセスの論文数の変化についての研究で、興味深く拝聴いたしました。

記念講演「読書による知識の体系化——分類・系統・アブダクション」は、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の三中信宏氏によるご講演でした。

三中信宏氏は、理系の学者さんですが、「読む・打つ・書く：読書・書評・執筆をめぐる理系研究者の日々」（東京大学出版会、2021）など、読書・書評に関する著書のある方です。

図書館の本についての質問に、「書き込みをしないと読めないで、図書館の本はちょっと…」とのこと。書くことは知識の体系化に役立つ、まとまった時間がないから書けないという人がいるが、すきま時間に書けば良い、などの言葉が心に残りました。

夜の交流会は残念ながら不参加です。

18日午前、第4分科会「キャリア形成「管理職としてのキャリア」」に参加させていただきました。

私から見た管理職（課長）のイメージは、仕事量が多く、残業代はもらえず、パワハラ

で訴えられるリスクのある大変な仕事。登壇者のみなさまのお話を聞いても、やはり大変そう。でもある一定の年齢になると、昇進試験にチャレンジせざるを得ないとのこと。課題解決や理想の実現ために、自ら決定し、実行できる立場を楽しみましょうという前向きなご意見に、ぜひ若い人たちに頑張っていたきたいと思いました。

昼休憩は、家族の食事の準備や買い物で、協賛企業プレゼンテーションには少し遅れてしまいました。「カーリルの最新情報2022」「ジャパンナレッジLibアップデート」を興味深く拝聴させていただきました。

午後は第7分科会「図書館建築・デザイン「アクティブラーニングスペースの現状とこれからを考える」」に参加させていただきました。

コロナ禍で、アクティブラーニングスペースの利用制限をしている図書館が、やはり多いです。Zoomのブレイクアウトルーム機能を使ったグループ分けで、少人数で話し合いができたのが新鮮でした。

夜の自主企画は残念ながら不参加です。

19日の、シンポジウム「[司書]養成の現在地」と自主企画は、私用のため欠席させていただきました。

私用で欠席したプログラムが多く、電話や宅配便の対応のため途中で席を外したり、猫がキーボードに乗って来て焦ったりしましたが、図書館を愛する仲間たちの熱い思いに触れ、充実した2日間でした。

来年は、対面とオンラインのハイブリッド開催になるかもしれないとのこと。知らない土地に出かけ、なじみの人や初めましての人と気軽に雑談できる対面開催も良いし、家にいながら参加できて、参加費も無料なオンライン開催も、参加のハードルが下がって良いと思います。

最後に、大会に参加された皆様、お疲れ様でした。実行委員長、実行委員の皆様、開催にご尽力いただきありがとうございました。

厚く御礼申し上げます。次年度の全国大会も楽しみにしています。

(てらしま・ようこ／奈良女子大学学術情報センター（附属図書館）)

全国大会に参加して - 雑感と感謝と -

井上 昌彦

今年度も、本研究会の全国大会に参加した。今回も、学びと交流の多い大会であった。以下、感じたことを記したい。

■オンライン開催

コロナ禍によるオンライン開催もはや3年目となり、すっかり定着した感がある。実行委員や全国委員の皆さんによるご尽力で、年々運営もスムーズになっており、感謝するばかりである。

しかしそれでもやはり、対面開催が待ち遠しい。全国の仲間と会って、直接議論したい。久しぶりに再会した全国の仲間と、飲みながら語り明かしたい。そして、新たな出会いも欲しい。

オンラインだと出会いがない訳ではないが、やはりリアルにお会いしての名刺交換に勝るものはない。来年以降コロナ禍が落ち着き、対面開催が復活することを願っている。

■第4分科会 キャリア形成「管理職としてのキャリア」

私が管理職1年目で白羽の矢が立ったのだろうか、同分科会にて話題提供する機会を頂いた。併せて、大会に先立って刊行された会報7月号の「特集：これから管理職を目指す人に伝えたいこと」への寄稿依頼も受けた。

分科会では、私はとにかく他の話題提供は示唆に富んでおり、参加された方々は考えさせられたのではないだろうか。

管理職としてのスタイルやキャリアは人それぞれであり、絶対的な基準は存在しないこと。管理職者も不安の中で、手探りをしながら最善を尽くしていること。その意向と機会があれば、管理職やリーダーにチャレンジして欲しいこと。話題提供や討論を通じ、若手にそんなメッセージを送ったようにも思う。

なお、私の話については会報7月号の他、私のブログに、管理職になった際の雑感を記しているので(※)、ぜひ。

■第6分科会 図書館経営「大学図書館経営危機をどう乗り越えるか～先進事例研究から学ぶ(公共図書館を中心に)」

この分科会には、担当者の一人として、企画から開催まで関わった。

開催にあたり重視したことは、勉強した気になって終わるだけの分科会にしないことだった。すなわち、参加者が各人の勤める大学図書館において、危機を乗り越える具体的な方法を考える場とすることを目的とした。

どうしたらそのような場にできるか、講師の常世田良先生からアドバイスを頂きつつ、一緒に担当した安東全国委員と3人で打ち合わせを重ねた。

分科会はブレイクアウトルームでの少人数の討論を中心としたが、その下準備として、参加者には事前学習をお願いした。指定文献を読むことに加え、各人が自身の図書館の「改革案」を実現するために自分の立場で何ができるか/してきたかを、考えて来てもらった。

このおかげか、参加者には積極的に討論してもらうことができた。講師から示された公共図書館の取り組み事例をもとに、参加者一人ひとりが、自分にできること、すべきことを考えられたと思う。こうした場に参加し、よりよい大学図書館をいかに実現するか考えてくださった、常世田先生や参加者の皆さんには感謝しかない。

なお、今後も同テーマについて、継続的に有志で勉強会を開催する。積極的に議論に加わってくださる方であれば、どなたでも歓迎する。ご関心があれば、お声がけ頂きたい。

■最後に

毎年こうして全国大会が開催され、学びや交流の場となっていることを、嬉しく思う。実行委員や全国委員など運営の皆さん、協賛

企業の皆さんに、深く感謝したい。

また、全国大会にご参加くださった全ての皆さんに、感謝する。参加くださり、討論する方がいらしてこそその全国大会なのだから。

最後に私ごとで恐縮だが、今回の全国大会をもって、17年務めた全国委員を退任した。毎年分科会を担当し多くの方々にご参加頂いたこと、一緒に討論できたことは、本当に楽しく貴重な経験だった。この場を借りて、お礼申し上げたい。皆さん、ありがとうございました！

(※)「課長の仕事を一ヶ月やってみた」. 空手家図書館員の奮戦記. 2022-05-08. <https://karatekalibrarian.blogspot.com/2022/05/blog-post.html>, (参照 2022-10-11) .

(いのうえ・まさひこ／関西学院大学図書館)

全国大会第3・第8分科会 参加報告

山下 真佑美

このたび初めて全国大会に3日間参加しました。2日目の分科会は、第3分科会（資料保存）と第8分科会（出版・流通）で、勉強させていただきました。全体の印象としては、どのプログラムにおいても質疑応答や意見交換が活発になされ、参加者全員で作っていく大会なのだなと感じました。同時に自身の業務やそれ以外の業務の情報について、普段から意識的に入出力をする必要性を痛感しました…。以下、分科会ごとに学び・考えたことを記載します。

2日目午前中の第3分科会「資料保存」…多くの大学の事例をお聞きしました。コロナ禍により電子書籍の導入が進んだ大学は多くても、紙の資料を重複とみなすかどうかは判断が分かれるようでした。重複と明確に定義している大学は少なく、また廃棄の基準や方法について、整備・検討中のところが多いようでした。電子書籍は、書架の狭隘化対策として導入を進めたいと考えている参加者が多い一方、利用者の認知度がまだ低いようでした。学生選書でも主に紙版の本が選ばれるというお話は、私の所属する大学でも同じと思いました。なおこの分科会で、私は発表を聞きながらメモを作成する手伝いをしました。メモはクラウド上に保存され、参加者に共有されていたため、こちらが作成後、議論中に改めて発表者の方から追記や訂正をいただくことができました。これにより正確な記録の作成ができたので、オンラインならではの便利な情報共有であると感じました。

2日目午後の第8分科会「出版・流通」では「我が国の学術情報流通における課題への対応について（審議まとめ）」（2021年2月12日）を事前に参加者が読み、そこで取り上げられているトピック、「ジャーナル購読価格上昇の常態化」、「オープンアクセス化を

巡る動き」,「転換契約の普及、APC負担増への対応」などについて、各大学の対応事例を紹介しあいました。APCの実態数値をもとに、大学本部に購読・出版(Read & Publish)モデルへの転換契約を提案する手法は以前からあるとの意見もあり、今後も増加が予想されるAPCの把握は重要であるとされていました。加えて2022年9月時点で140円を超える円安についても、各大学で対応策を模索中であると話題になりました。購読価格の上昇に対して、購読の中止を主張するだけでは教員の理解は得られず、中止後の学術情報へのアクセスの保証についてもサブスクリプションやペイパービューなどの対策が考えられていました。今後の対応としては、図書館が教員・URA・大学本部などにどのように訴えて商業出版社の囲い込みの現状を変えていくかを考えること、またOAにおいては、研究予算の少ない若手研究者にとって重要なグリーンOAも重視していく必要性があることなどが確認されました。

なおこの分科会では、ブレイクアウトルーム(以下ルーム)は使用されませんでした。第3分科会では2回使用されました。ルームを使用した場合、人数が減り、発言する機会は増えます。しかし少ない時間内では、話をまとめることができない場合もありました。逆にルームが使用されない場合、司会の方の負担は多めながら、議論の流れをまとめやすくなります。ただ人数が多いため、個人的には発言にやや緊張感を持つようになりました。分科会ごとに進行方法が異なったため、どちらの経験もでき、今後のオンラインでの議論を進める際の参考にもなりました。学べたことの一部は以上です。内容がバラエティに富んでおり、とてもまとめきることができませんでした。今後の業務の糧として、明日からもがんばります。

(やました・まゆみ/広島大学図書館)

4 回目の全国大会に参加して

川崎 陽奈

私が初めて全国大会の全日程に参加したのは3年前、2019年の神戸大会です。以来、毎年参加し、今回で4回目の参加となりました。

さて、全国大会フラッシュ号ということで、大会に参加して得た気づきを振り返ります。

1日目の記念講演は、読書による知識の体系化というテーマで行われました。普段自分が行っている読書と一致する部分も多く、とても興味深かったです。「読書」をテーマとした講演でしたが、その内容は、何かを学ぶことそのものにも当てはまるように思います。読書を「往路」(付箋や書き込みをしつつ読了)と「復路」(読んだ内容の体系化)を一つのセットとして知識の体系化と捉える指摘は、新しいことを学んだり取り組んだりする中で、情報を断片的に蓄積し、それらを後から振り返ることで、一つの知識や経験として自分の中で体系化していくという日常的な経験を想起させられました。

2日目は第3分科会(資料保存)と第8分科会(出版・流通)に参加しました。午前中の第3分科会では、主に紙資料から電子資料への置き換えをテーマに、報告と意見交換が行われました。その中で電子資料を契約している場合でも、単純に紙資料を除籍・廃棄することの難しさが話題となりました。電子資料の契約が紙資料とは異なり、あくまで「利用する権利」であることがその要因の一つだと思います。形のない電子資料の取り扱いにはまだまだ課題が多いと感じた分科会でした。

午後の第8分科会では、「我が国の学術情報流通における課題への対応について(審議まとめ)」(令和3年2月12日)を踏まえて、意見交換が行われました。自館でも取り組みそうなことや、ペイ・パー・ビューやAPCの把握等、これってどうだろう?と思ってい

たことの情報も得ることができ、収穫が多かったです。

3日目のシンポジウムでは、司書養成課程に関する報告と、図書館員に求められるもの、必要な人材、研修についての報告がありました。変化していく仕事にチャレンジできるのが大学図書館職員の面白みであり、チャレンジ精神を持って様々なことに挑む職員が必要であること、チャレンジをする背中を後輩にみせることや、チャレンジすることが各自のキャリアにとってプラスになる仕組みを考えることといった話が印象深かったです。チャレンジをするかどうかは、時に組織の問題でもあり、時に個人の問題でもありますが、その背中を押してくれる存在の有無は、個人が一步踏み出すにあたっては大きな違いになると思います。

最後に3日間全体を振り返ると、各テーマの切り口は様々でしたが、今年の全国大会では「図書館は何をしていくのか、何ができるのか」という問いに対して、向き合い考えること、そして変化していくことの必要性といったことを各所で感じました。

また個人的にはこれまで参加した4回の全国大会を振り返って、大会に参加する度に、知りたいと思うことや得られる気づきが増えているように思います。その年の全国大会で得たものを、1年かけて整理し、業務にフィードバックして、また翌年の大会で新たなものを得る、というサイクルは、記念講演であった読書による知識の体系化とどこか似ています。私にとって全国大会に参加することは、図書館員としての成長の一つの手段と言えるかもしれない、大会を振り返ってそんなことを思いました。

(かわさき・はるな／西南学院大学図書館)

参加する全国大会、作る全国大会： 大会実行委員として

赤澤 久弥

第53回全国大会は、9月17日（土）から19日（月・祝）の3日間にわたり、多くの参加者に恵まれ開催されました。実行委員の立場からの準備の経過や裏側を、また、大会の一参加者として所感と合わせて、ご報告します。

全国大会は、全国委員会と常任委員会における大枠の確認はありますが、具体的な企画や実際の運営は、大会実行委員会が主体となって行われています。今回の全国大会は、コロナ禍の状況を見つつオンライン大会となった先の2回と異なり、当初からオンラインで開催することが決まっていた。また、プログラム構成は、前回大会と同様に、従来のオンサイト大会に沿うことが、昨年12月の全国委員会で確認されました。ついで、3月の全国委員会では、大会の実施概要や予算が了承され、また、各地域グループに実行委員の推薦を依頼することになりました。これは、従来行っている会員の皆さんへの実行委員募集に加え、より多くの方に加わっていただくことを意図したものです。以降、実行委員会の陣容を整え、4月にオンラインで開催されたキックオフミーティングを経て、山口大会実行委員長をはじめ13人のメンバーで、大会準備を進めました。

オンライン大会も3回目となり、とくに実行委員を継続している手練れのメンバーが複数いたこともあって、準備はおおよそ予定スケジュールに沿って進みました。とはいえ、参加申込に使うPeatixの特定商取引法に対応した適切な案内表記の検討、大会資料の配布方法を改善するためのMicrosoft365を使った方法の導入といった新たな課題への対応や工夫をはじめ、滞りない実施のための種々の取り組みがありました。なお、今大会からこうした実行委員会での検討や準備は、大会運

大学の図書館 第41巻第10号 (No.587) 2022年10月25日 (毎月25日発行) ISSN: 0286-6854
編集・発行: 大学図書館研究会 年間予約購読料: 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付

Fax: (044) 989-2250 E-mail: shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00140-6-482205 大学図書館研究会出版部

三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座: 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付

E-mail: dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

営ノウハウを蓄積し引き継いでいくため、従来の実行委員会MLのやり取りを、Backlogに集約しています。また、今回加わった実行委員メンバーからは、記念公演にお招きする講師や新機軸の自主企画をはじめとして、新鮮なアイデアがありました。滞りなく大会を運営することと共に、より魅力的な大会としていくため、多くの方に関わっていただく意義を感じる次第です。

大会期間中は、一通りのプログラムに参加しました。コロナ禍を経て、オンラインでの議論や交流に皆さんが習熟されており、どのプログラムもスムーズに進んだように思います。また、研究発表や記念公演、分科会やシンポジウムの活発な質疑に刺激をいただき、交流会や自主企画での交歓も貴重な機会に感じました。なにより、発表や講演をいただいた皆さま、充実した分科会を企画された全国委員の方々、協賛いただいた企業各社には、実行委員の一人として御礼します。

さて、全国大会実行委員という立場を重ねていますが、毎度、この経験を実行委員だけが味わうのはもったいないと感じます。確かに、それぞれが可能な範囲でとはいえ、ある程度の時間を準備や運営に使うことになります。しかし、新しいツールを使ってみたり、よりよい方法をメンバーで考えたり、場合によっては自らが実現したい企画を形にしたりすることは、本務とは別だからこそ出来ることもあると思います。また、オンラインはよ

り参加しやすい利点もありますが、一時の情報を得るだけに終わりがねないことも自戒として感じます。そこにおいて、自ら発表したり、あえて運営に関わったりする意義があるのではないのでしょうか。オンラインであれ、オンサイトであれ、次の大会でもたくさんの参加者に会えることと併せて、いっしょに大会を作るメンバーがより増えると、うれしく思います。

(あかざわ・ひさや／大阪大学附属図書館)